

地球の年齢は現在46億年ほどだそうです。これはウラン238（半減期45億年）が崩壊して鉛になるところから推定するのです。そしてこれから地球はどうなるのか、…76億年程度すると赤色でさらに巨大になった太陽に飲み込まれるというのです。しかも、それ以前に、今から10億年後には今以上に高温になっていく太陽に引き寄せられ公転軌道が小さくなるので、人類を含む生命は生きていけなくなるそうです。生き延びるためには地球の近くを通過する小惑星の引力により太陽から離して公転軌道を大きくする方法があるといえます。これにより50億年寿命を延ばすことができるということです…

現代のように科学が未だ発達していないその昔、ギリシアでは哲学者が世界や宇宙について論じていました。ユダヤでは、そういう問題をこのように論じていたのでしょうか…タルムードには「洪水の世代は来たる世に与ることは出来ぬ」と「シシュナ」と書き記されています。これはノアの物語を読めば分かるように、

主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。主は言われた。「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這つものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」

(創6・5〜7)

人の悪が世にはびこるようになったゆえに、神がひとを滅ぼすのです。ただし、洪水の後に神はいわれます…

「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。…水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。16 雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」

(創世記9・12〜16)

ノアの洪水物語により言えることは、再び、神が、洪水によって人間を滅ぼすことは決してないけれども、人間の悪を放置することはないということです。悪は相変わらず世に蔓延していることをわたしたちは日々確かめています。ノアの洪水以後も神はいかにして悪は滅ばされるのか…、この問いはひとびとの問いとなっています。

それにしても、アドヴェントの最初の週に、このような話は、わたしたちを困惑させます。御子イエスの降誕を喜びをもって迎えるための準備をはじめこの日に、なぜ世の終わりと裁き、悲嘆と苦悩について思いをはせなければならぬのでしょうか…この時期教会の暦が新たになり身の回りを片付けはじめますが…

今年の3月コロナウィルスの感染が広がる直前に、役員会で諮って欲しいと手渡された一枚の紙が目にとまりました。土田英順さんのコンサートを再び開くために役員会で

諮って欲しいとの要望を受けていたのです。

そして記憶がおぼろげによみがえってきました。前回のコンサートで土田さんが曲の合間に語ってくださったことが、です。演奏活動で訪ねた被災の地で、…女川だったかな…演奏会が終わって居酒屋に入って飲んでいたら、カウンターで相手をしてくれた女性が、翌日別れ際に見送りに来てくれて、自分が水に飲み込まれて亡くなった母を自ら穴を掘り土をかぶせて埋葬したのだと…。

36 「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。37 人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。38 洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。39 そして、洪水が襲って来て一人残らずうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。40 そのとき、畑に二人の男がいたら、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。41 二人の女が臼をひいていたら、一人は連れて行かれ、もう一人は残される、もう一人は残される。」

聖書でもやはり洪水により生死の世界に分かれた二人の男たり、二人の女たちが、引き合いに出されています。キリストが、再び来られるときには、「40畑に二人の男がいたら、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。41二人の女が臼をひいていたら、一人は連れて行かれ、もう一人は残される」と福音書は告げます。洪水によって海に飲まれるひとは無念の死を遂げます。残されたひとも、癒やしがたい苦悩の日々を送るに違いありません。ふたりの女のうち洪水に

飲み込まれたひとは、やはりいつさいの心の準備もなく、水に飲まれてしまい、残されたもつひとりは、時折襲ってくる喪失の悲しみに心をかき乱すでしょう。こういう人たちの死は、ひとりひとりの死が、洪水という外的な状況と結びつけらるがゆえに、そうではない死別から隔離され、特別に悲しむべき死として特別に隔てられ受け止められるものです。

しかしそういう死者と生者の隔てを打ち壊して、ひとたび十字架の死、復活なさり天に挙げられたキリストが、再び来られるのです。

十字架の死という特別な死、特別とは呪われた死、敗北の死という意味です。後に使徒パウロは、十字架の死が、神とひととの和解の出来事だと理解します。なぜならイエスを敗北の死につけたと勝ち誇ったと思ひ込んだ勝者たち、その筆頭であるパウロは、自ら敗者であることに気づかされたからです。当初勝ち誇る歓喜は、程なく虚無に貶められ、神の愛が、心の貧しい者たち、悲しむひとびと、義に飢え渴く人々、…すなわち死に近い人たちにあると教えられたことが、イエスご自身の身に起こったからでした。

「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。▼悲しむ人々は、幸いである、／その人たちは慰められる。▼柔和な人々は、幸いである、／その人たちは地を受け継ぐ。▼義に飢え渴く人々は、幸いである、／その人たちは満たされる。▼憐れみ深い人々は、幸いである、／その人たちは憐れみを受ける。▼心の清い人々は、幸いである、／その人たちは神を見る。▼平和を實現する人々は、幸いである、／その人たちは神の子と呼ば

れる。▼義のために迫害される人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。

十字架の敗北は、復活により勝利となりました。人々は、悪による勝利は、敗北であることに気づかされ、神の敗北は、勝利であることに確信が与えられました。ひとびとの悲嘆と苦悩は、再び来られるキリストにより喜びと希望に変えられるでしょう。神の支配が完成する時、全地にあまねく及ぶまで。

42だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。43このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。44だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

救い主の到来を待ち望むアドヴェントにおいて、わたしたちは悲しみ、忘却すべきもの、苦悩がないかのようにな、ただ喜びだけを迎えるのではなく、まさに悲嘆の中に、苦悩の只中に、喜びを迎えるべく、目を覚まして備えます。